本を選ぶ

NO.421 2020年(令和２年)６月２０日
●発行／ライブラリー・アド・サービス
http://www.las2005.com
本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●＜ろん・ぽわん＞出版業界 自粛とロックダウン
●紙魚の繰り言 第２８回
●図書館を離れて（第４６回）
●コロナの大流行と読書
●＃図書館は動きつづける

ろん・ぽわん

出版業界 自粛とロックダウン

「新型コロナウィルス」ということばを聞いてから早６ヶ月。厚労省が１月半ばに「武漢以外での感染は確認されていません」と発表した以降、目まぐるしく状況が変わりました。WHOが「COVID－19」を正式名称にしたのは２月11日です。もう、そんなに時間が…。今や､2月３月の記憶はおぼろげです。緊張した４月と、その疲労を感じながら毎日を過ごした５月のことだけが鮮明に残っています。

出版業界への第一波は書店を直撃しました。中国政府が「国外への団体旅行の禁止」をした１月末以降、客足が一気に遠のきました。顕著だったのは銀座や浅草、横浜など外国人観光客が多い地域です。書店で本を買うのは､ほとんどが日本人ですから｢なんで？」と思いますが、人は人が集まるところに集まりますから、街全体がガラガラになった繁華街は日本人もめっきり減りました。

開けているだけで（人件費など）赤字になる、という店も多数ありました（書店に限ったことではありませんが)。都心からは人が激減しましたが､郊外･住宅街の書店では売上が伸びたところも多々あります。出版業界全体の販売金額も１月２月は目立った落込みもなく、ある意味、普段通りでした。更には、アマゾンを筆頭とするネット書店の売上が急増したのも、この頃からです。

ロックダウン（※「都市封鎖」は誤訳？）と呼称された外出自粛要請はまだ出されていませんでしたが、世の中全体に自粛ムードが広がってきました。そして３月初めから全国一斉休校という強制的な要請です。在宅時間が増えた子どもたちの需要増で「学参」「コミック」という児童書関連は前年比を超えました。

出版社・書店・取次各社の対面での営業も自粛を要請されました。通常、出版社は新刊の見本が出来た時点で取次に持参し配本や送品の相談をしますが、対面での説明や交渉が出来なくなったことで、作り手の思いを取次や書店に伝えることが難しくなり、結果として機械的な実績重視の作業になったように思います。

ショッピング・モールや百貨店に入っている書店も、モールや館自体のロックダウンにより休業を余儀なくされました。書店の休業中に発売された雑誌や書籍の一部は店頭に並ぶこともないまま返品になりました。休業中の書店に送品しなければいいのに！と思いますが、流通を担う取次は「どの店が営業／休業」という日々の状況を把握することは困難でした。出版社によっては状況を鑑みて刊行を遅らせることもしました。それらの本がお目見えするのはこれからです。店頭の容量を超える量の本が出版されれば、それはそれで「並ばない本」が生まれてしまいます。こういう時こそ、本と読者の橋渡しの場としての図書館に期待します。(酒井 謙次)

※５月20日付「朝日新聞」で倫理学者・古田哲也氏が「ロックダウンは住民や都市の機能への制限を指す言葉であり、実施の形態は様々」と書いています。実際にも封鎖ではなく（場所や建物への出入りや行動の）規制であり要請でした。

紙魚の繰り言　第２８回

坂部　豪

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、今後どうなっていくのでしょうか？　はたして終息を迎えることがあるのか、地球上の人々が感染を恐れることなく、心からくつろぐことのできる日が来るのでしょうか？　なんともはや、大変な時代になってしまいました。

大げさな言い方かもしれませんが、社会全体にカタストロフィの不安が広がっているような気がします。それは、今回の危機が単に健康上の問題であるだけでなく、経済も含めた社会全体の問題になっているからです。

この原稿を書いている時点では、2021年に延期した東京オリンピックも、開催が可能かどうかあやしいものだと私には思えます。

私も初めはそのうちインフルエンザのように自然におさまっていくものと思っていましたが、甘い見方でした。感染初期の、症状がはっきりしない段階で、他人に移してしまう可能性があるということと、無症状者が多いために、サイレントキャリアーが発生しやすいということ、さらに今後のウイルスの変異により強毒化する可能性があることの３点が問題のような気がします。そのうえ、いったん重症化すると、急速に容態が悪化するのが困り物です。

ただ、1918年から1920年の、ちょうど100年前に流行したスペイン風邪では、感染者は世界の人口の25-30％（WHO）で、約５億人との説もあるほどですから、桁違いです。致死率は2.5％以上、死者数は全世界で4,000万人（WHO）、5,000万人、一説には１億人ともいわれています。*1
（新型コロナウイルスでは、６月初めで世界で約653万人が感染。死者は約38.7万人）。

*1　国立感染症研究所感染症情報センター「インフルエンザ・パンデミックに関するＱ＆Ａ」
http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/pandemic/QAindex.html

日本の内務省統計では、約2,380万人がスペイン風邪に感染し、約39万人の死者が出たと報告しています。*2

*2「百年前の大流行（パンデミック）―スペイン風邪　県内回顧　１～５」茨城新聞　2020年５月14日～５月18日

よもや、今回の新型コロナウイルスでスペイン風邪ほどの感染拡大はないと思いますが、用心にこしたことはありません。特に、第２波、第３波が問題です。

先日、きっかけはコロナウイルス対策というわけではないと思いますが、大学のミニ同窓会がビデオ会議アプリのＺＯＯＭを使って開催されました。大学卒業以来44年ぶりの同級生との再会は、なかなか楽しいものでした。それぞれの生活の場が、全国に散らばっているので（たとえば、奈良だったり、仙台だったりと）、実際に会って話をするのは難しいです。オンライン上に集まったのは、わずか６人ですが、これはこれでいいものだと感じました。乾杯もできますし。

100年前には、こんな通信手段の想像もつかなかったでしょうから、新しい工夫で人とのつながりを保ちながら、前へ進んでいきたいものです。

図書館に期待する

何にしても、図書館は新型コロナウイルスの正確な知識を手に入れる基地、情報源になることが求められるでしょう。誰もが考えることは、新型コロナウイルスの様々な疑問に答える資料の提供をお願いしたいということです。手っ取り早いところでは、新聞の記事で参考になる記事のガイドがあるといいのですが。本はもちろんですが、新しい情報はやはり新聞です。

たとえば、コロナウイルスとはどのような種類があって、どこが新型と呼ぶ所以なのかとか。そもそも、風邪とインフルエンザとはどう違うのか、どうも風邪とインフルエンザの違いは病原体の違いかと思っていたのですが、そうでもないようで

す。そもそも新型コロナウイルスと強毒性の鳥インフルエンザウイルスではどちらが危険なのか、とか。感染予防対策で足拭きマットは役立たないのかとか。よく分かっていないことがけっこうあります。

また、図書館のホームページに参考になるリンク集やパスファインダーの公開もお願いしたいところです。

物語の想像力

さて、その上でですが、できれば、感染症をテーマにした物語も紹介してほしいところです。一つは外出をしなくてもできる楽しみとして読書を勧めるために、またより深刻なパンデミックの事態に遭遇した時の心の構えのために。

たとえば、アルベール・カミュの『ペスト』（新潮文庫／原著 1947）です。高橋源一郎さんが取り上げています。*3

*3「コロナ禍どう生きる―高橋源一郎さんが薦める本」東京新聞／ 2020 年 5 月 25 日

アルジェリアのオランという街に大量の鼠の死骸が見つかり始めます。ペストが蔓延しはじめたのです。が、気付かれることなく、静かにペストは感染を広げ、行政の対応も後手となり、やがて人も感染し、街が封鎖される事態となります。

「世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる」（『ペスト』より）

何やら、今回の新型コロナウイルス禍のことのようです。高橋さんが薦める次の１冊は、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』。コレラが蔓延して死の街となったヴェニスが舞台です。イタリアつながりでいくと、イタリアのボッカチオの『デカメロン』は 1348 年ペストの蔓延からフィレンツェ郊外に逃れた若者 10 人が他愛もない話を語りつくすという設定です。

日本だって、今は比較的死者が少ないですが、いつ感染爆発になってもおかしくないように思います。篠田節子の『夏の災厄』（現行本　角川文庫／ 2015 ／原著　毎日新聞社／ 1995）を読むと、原著は 25 年も前なのに今の地方自治体のサービスが非常勤職員で成り立っているという実状がよく分かります。それだけでなく、医療の現場がリアルに描かれていて、ノンフィクションを読んでいるようで、ぞっとします。

もう１冊あげておくと、高嶋哲夫の『首都感染』（講談社／ 2010）。こちらは中国発の致死率 60％の強毒性鳥インフルエンザウイルスが感染を拡大し、東京を都市封鎖しなければならないという事態になった時、日本はどうなるかということです。

ＳＦ小説も

ＳＦ小説では、人類が破滅するといったテーマはよく描かれます。特に、ウイルスによって、世界が破滅した後、生き残った人類がどうやって生きていくのかという話は多いです。

まずは、ジャック・ロンドンの『赤死病』（新樹社／ 2010 ／原著 1915）。雑誌に発表されたのが 1912 年ですから、スペイン風邪より６年前です。

発症すると全身に赤い発疹が現れ、必ず死ぬという赤死病が流行した 60 年後の 2073 年、生き延びた老人が当時の状況を孫たちに語るのですが…

未読です。どうも明るい未来の話ではないようです。

反対に、生き残った人類を肯定的に描いているのが、ジョージ・Ｒ．スチュワートの『大地は永遠（とわ）に』（早川書房／ 1968 ／原著 1949）。ただし、文明に対する疑念は共通しています。物語の終りで、主人公は図書館の建物を発見するのですが、蔵書がどうなっていようと関係ないのです。

紙数が尽きました。ひとまずタイトルだけあげておきます。小松左京『復活の日』（角川文庫／原著　早川書房／ 1964）。穂波了『月の落とし子』（早川書房／ 2019）。石田衣良『ブルータワー』（徳間書店／ 2004）。他

（さかべ　たけし）

図書館を離れて（第４６回）

―「いく」と「ゆく」①―

並木せつ子

石井桃子の文章は読みやすく、難しい言葉や漢字は使っていないのに、安易ではない。私などが書く文章と何が違うのだろうと（おこがましくも）考えていたが、『幼ものがたり』を読んでいるときに、ある言葉の存在に気がついた。決して珍しい言葉ではないのだが、少なくも私が日常的に使ってきた言葉ではない。それは石井桃子の文章に感じる“心地よさ”の要因のうちの一つではないのかとも思ったのである。

その言葉は「ゆく」――「三室へゆく」「大きくなってゆく」「つれてゆかれた」のように、「行く」でも「いく」でもなく「ゆく」が使われている。私自身は「学校へ行く（いく）」「形を変えていく」というふうに話し、書いてもきたが、もしかすると気づかないままに間違いをおかしてきたのではなかろうか。あわてて辞書を繰ってみた。

とりあえず手元の辞書を見る。『広辞苑　第五版』(1998 年）では、「いく」という見出し語は《「ゆく」に同じ。奈良・平安時代から「ゆく」と併存》という内容が簡単に書かれているだけで、「ゆく」という見出し語の方に多くの意味や文例が取り上げられている。分量にして 5 倍以上だろうか。『岩波国語辞典　第六版』(2000 年）に至っては、「いく」は《→ゆく（を見よ)》としか記されていない。「ゆく」が優勢ではないか。

他の辞書もあたってみた。『広辞苑　第七版』(2018 年）でも「ゆく」に重点が置かれ、扱いに大差はない。第一版（1955 年）を見ると、七版より全体的に情報量は少ないが、やはり「ゆく」の方にあらかたの意味と文例が載せられている。「いく」は《「ゆく」の転》など３つほど意味が載っているだけで、わずか 2 行半。さらにさかのぼって、大正時代の『大日本国語辞典』（上田万年著）では、「いく」は《ゆく（行）に同じ》とだけあって、あとは文例が少し載っているのみ。年代が古くなると「いく」はますます劣勢なのである。しかし現在の『改訂　常用漢字音訓表』で、「行」の読みは、「コウ、ギョウ、アン、いく、ゆく、おこなう」の 6 種が認められている。「いく」も間違いでないことだけは確認できた。ならば使い分けはあるのだろうか。「いく・ゆく」の意味は詳細にみると「進行・移動する」「通過する」「物事が進行する」「成長する」「満足する」の他いくつもあるが、大雑把には、目に見える場所的な移動か、目に見えない時間的な経過かに分けることもできそうだ。「いく」と「ゆく」は、そうした意味の違いによる使い分けだろうかと予測してみたが、そうではなかった。

『日本国語大辞典　第二版』(2000 年）には「いく」と「ゆく」の関係についてこう記されている。《「いく」「ゆく」は合わせ用いられる。…使用度については室町を過ぎる頃まで「いく」が劣勢だった。…「いく」は口頭語として使用度を高めていく…明治以降では、国定読本（明治 37 ～昭和 24）が「いく」の方を基準としたが、大正期には一般の傾向として、一人称者の行為に「いく」、「三人称者」の行為に「ゆく」という使い分けが認められる》（この大正期の傾向は『幼ものがたり』にはあてはまらない)。

また、アナウンス室編の『NHKますます気になることば』には《「学校にいく」でも「学校にゆく」でもどちらも正しい言い方なのですよ…詩的な文脈や文語的な表現に「ゆく」が使われることが多く、…「行く年来る年」や「行く末」などの慣用的な表現も「ゆく」というのですね》とあり、『日本国語大辞典』などの辞書の編纂者は『悩ましい国語辞典』の中で《「いく」の方が話しことば的な感じをもっているようで、「過ぎ行く」「暮れ行く」など、文章語的な語の場合には…「ゆく」と読むのがふつうである》と書いている。

「いく」の方が日常的に使われているが、どちらでも間違いではなく、「行く秋」「行方」などの慣用表現以外に明確な使い分けはなさそう、というところは理解したのだが、一旦気づいてしまうと他の人の文章がどうなっているのか気になって仕方なくなっていた。（なみき　せつこ）

コロナの大流行と読書

溝上 牧子

年が明けてから、あれよあれよという間に新型コロナウイルスにより、世界中の人たちが、死の恐怖に怯え、ほとんど外に出ない生活になった。

朔北社でも緊急事態宣言以前より家で出来る仕事があれば本人が希望するかぎり在宅勤務を推奨された。社内はデータ部を中心にして在宅勤務となり社内は閑散とした。私はもともとこの時期、決算の真似事をするので忙しい時期に突入するためしばらく出社をすることに。また倉庫はありがたいことに動いている。少ない出庫であれ手配すれば納品できる状況でもあった。会社には時折、１人２人と出社してきて続きの仕事を持ち帰る。それがで出来ない人は、社長なり、データ部のリーダーが進捗状況を確認し、必要なものを送る手配をする。私はというとあれが終わったら、これが終わったらと思っているうちに５月の末を迎え、そして今日に至っている。

幸い会社は数年前から都会とは逆方向の場所に引越して、密には無縁で安全に通勤することができた（そもそも、コロナ以前から密ではない地区なのだ）。初めのうちこそ戦々恐々としビクビクしながら通っていたが、今は手すりや、つり革につかまらない、家や会社に入ったら手洗いをするということを気にかけつつ穏やかに過ごしている。さすがに決算書提出間近になってからは残業もしたが、基本的には、ほぼ定時勤務の残業なし。今までにないくらい家にいて、自分の自由になる時間を過ごした。ＳＮＳで流れてくる出版関係者のメッセージを受け取りながら、ここから繋がる人たちを少しでも元気にできる材料はないだろうかと考えていた。こんなときにステキなアイデアが即浮かぶわけもなし、元気のない人をけん引するような力もない。でも、できることを淡々とやろうと心に誓う。発信し続けることには意味があるはずだ。会社のＳＮＳには本の紹介、自分にとって役立った情報はきっと他の人にも役立つかもしれないと共有したり、多少現在の状況と結びつく気持ちを書くようにした。後ろ向きにはならないように気を付けながら。それは外に向けてやったことだが、自分自身そうすることで、心や頭の中の整理をするためにも役立った。

その間も国は右往左往し、日本全体が個々に判断を迫られた状況になっていたように思う。そして緊急事態宣言が段階解除された今、国がようやく本格的に動き始めたと感じるのは私だけではないだろう。だがこの期間いろんなことを考えるチャンスが国民にも与えられたと思う。漠然と受け入れていただけでは何も変わらないということに気づいたはずだ。コロナですぐに動けなかったのは、それ以前の問題が山積していたからだ。大きな出来事が起こるとそれは顕著に表面化する。

そんな中、土日の外出予定などあるはずもなく、落ち着かないが時間があるので本を読んだ。いくつかの個人店のネット書店で数冊ずつ購入した本はどれも今の自分にぴたりとはまった。不思議なことに本というのは驚くほどぴったりの時に手元にやって来る。それらの本を読んだのち、再読したい本を考えてみた。その時すぐに頭に浮かんだのは以前、友人に借りて読んだ有吉佐和子さんの『女二人のニューギニア』（朝日文庫）だった。これは作家の有吉さんの驚くような体験を書いた旅行記だ。すでに流通していないようなので、読みたい時に古本をすぐ手に入れることができたのは本当に運がよかった。ニューギニアの未開のジャングルの中。想像するが、想像をはるかに超える場所。そこをひたすら歩きまくる。迎えに来てくれた友人の暮らす家にいくだけで何日もかかるのだ。それも歩いてでしか行けない場所！　普段は軟弱な（失敬！）有吉さんがその普段だったら絶対無理な状況をどうにかこうにか受け入れつつ助けられながら進んでいく姿。映像だと目で見たものが全てだが、読むというのは読み手の数だけその想像が膨らむ面白さがある。

（みぞかみ まきこ：朔北社）

＃図書館は動きつづける
――新型コロナウィルス感染対応の緊急宣言の下で

中山 美由紀

おそらく、私たちは３月以前の世界に戻れることはないだろう。新しい世界のカタチ、新しい生き方を新しい価値観の中で探っていくことになる。

突然の臨時休校で進む「教育の情報化」

２月 27 日晩の首相による全国の学校への臨時休校要請と、４月７日の全国の緊急事態宣言、その後の休校、6 月前後に分散登校がはじまった。おそらく半年、1 年と影響は続いていくのだろう。

３月はまだ、終息を信じて、学校の教員たちは課題づくりと配布という緊急の対応だった。しかし、感染者は増えていく。４月の異動、着任の後、すぐにも出せたであろう緊急事態宣言が遅れた。緊張の中での始業式、入学式を迎えるや否やで再びの休校。１日、半日で対応の変更を余儀なくされた教職員の負担はいかほどであったろう。見通しの立たない中、オンライン授業に踏み切る学校も相次ぐ。これまでも情報化を図ってきていた私学は３月からすでに準備を始めていた。公立も遅れて始まった。岐阜県や熊本市はオンラン授業の導入を宣言した。（日本経済新聞 2020.4.28）（西日本新聞 2020.4.4）神奈川県立高校では県内生徒と教職員 14 万人にグーグルアカウントを付与、google classroom という学習のためのツールが 2019 年から使える状態になっていた。（教育家庭新聞 2020.2.3）

小渕内閣が打ち出したミレニアム・プロジェクトから 20 年、全く進まなかった「教育の情報化」が、一気に動いた。抵抗する地域もあるようだが、流れは止まらないだろう。

博物館・美術館・図書館の動向

３月早々に国立の博物館と美術館が休館になった。代わりに公開予定だった展示案内を動画で配信する（東京国立博物館）などのサービスが行われ、社会教育機関での成果やコレクションをネット上で紹介する動きが世界的にも広がっている。

公共図書館は saveMLAK による「COVID-19 の影響による図書館の動向調査」（2020.4.20）によると、1626 館中の休館は 88%。貸出本の「宅配」サービスが増えつつある。電子書籍やデータベースなどのオンラインサービスの利用ができる館が 47 館。インターネット上の利用できる情報源の紹介が 34 館。オリジナルコンテンツをネット上にあげているのが 24 館となっている。電子書籍をはじめ、非来館型サービスの有難みが明らかになっている。（https://savemlak.jp/wiki/saveMLAK:%E3%83%97%E3%83%AC%E3%82%B9/20200424　2020.5.3 確認）

学校図書館の動向

文部科学省は４月 23 日「休館中の図書館、学校休業中の学校図書館の取り組み事例について、参考にしていただくよう周知をお願いする事務連絡」において、分散登校日や郵送による貸出、おすすめ本の学校ホームページでの紹介をあげている。実際に貸出はそのように行われている。電子書籍の導入を始めた学校もある。さらにはインターネット上の情報源の紹介やコンテンツを作ってアップすること、家庭学習の支援のための情報提供が欲しいところだ。

1) 休校中の学習・読書のためのリンク集

もともとフリーで公開されていたコンテンツに加えて、期間限定で公開となった電子書籍や動画、塗り絵、映画、劇場中継や、演奏会、データベースなどが次々と登場した。博物館・美術館・図書館等のコレクションや展示案内・研究紹介もあれば、著者や俳優による読み聞かせや朗読も公開された。そのようなフリーコンテンツのリンク集を作って案内した実践が見られた。（工学院中学校・高等学校、関西学院中学部図書館、都立町田総合高等学校図書館、明治学院中学校・東村山高等学校など）現在、鳥取県立図書館、都立図書館などもまとめているが、文部科学省も「子どもの学び応援サイト」で総合リンク集を作っている。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/

gakusyushien/index_00001.htm　2020.5.3 確認）

２）学習、読書のためのコンテンツづくり

図書館自ら情報を創りだしてもらいたい。

三重県インターネット放送局の「三重の教育」の在宅学習用動画には三重県学校図書館協議会司書部が作成した「本ススメ」がアップされている。（2020.5.2 確認）読書のすすめと利用教育を合わせた動画は高校生にはふさわしい。今後も増やしていく予定だというので、期待される。

東京都立高等学校学校司書会ではホームページに「都立高校の生徒のためのラーニングスキルガイド～レポート作成編～」（2018）を公開した。

＃図書館は動きつづける・・・・・・・・・・・・・・・

子どもがいないと何もできることがないという前に、何ならできるのかを探って、１つでもなにかを実践してもらいたい。直接会えないのであれば、インターネットの力を借りよう。場の共有ができなくとも、ネットの上にもバーチャルな「広場」は広がっている。子どもの学びを止めないと頑張っている教員を支援していくこと、それもまた、学校図書館の使命であることを忘れまい。

（なかやま　みゆき：立教大学）

注：「＃図書館は動きつづける」は県立長野図書館のフォーラムから引用させていただいた。